

夢を追いかけ、誰よりも愛と平和を求めて働き掛けてきただけなのに、それによって、誰かの命を犠牲にしてしまうという望まない結果を引き起こしてしまうような抗えない現実があります。職場やクライアントの求めに真摯に応えようとすればするほど、そのストレスを愛する家族や誰かにぶつけ、傷つけてしまうという矛盾。被爆者の痛みを思い、原発の廃止を訴えれば訴えるほど、そこで働かざるを得ない労働者とその家族の生活を窮地に追い込んでしまうという矛盾。…人間は、いつもそんな悪意のない矛盾を抱えているのかもしれませんが。

本日の聖書箇所で、イエスは「戦争とか暴動が…まず起こるに決まっている」（9節）と語っています。イエスは、人間が自らの力で打ち立てようとする平和や正義といったものに懐疑的であったのではないのでしょうか。人間は誰かを裁けるほど確かな真理を持ち合わせておらず、むしろどこかで誰かを犠牲にしてしまうという矛盾を生み出してしまう存在だからです。それ故に、イエスは「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授ける」（15節）のだから、「世の終わり」（神の裁き）を忍耐して待つようにと促しています。パウロもまた、「主が来られるまでは、先走って何も裁いてはいけません。主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。」（1コリント 3:5）と語っています。

自分は相手を正しく裁き得ないし、もしかしたら、裁かれるべきは自分の方かもしれない…そんな深い自己理解に立たされるとき、私たちは次のような聖書の言葉へと招かれていきます。「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。…愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐はわたしのする事、わたしが報復する』と主は言われると書いてあります。悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」（ローマ 12:14～21）。怒りと憎しみに満たされるようなことが、これからも起こるかもしれません。それでもなお、私たち自身の正義ではなく、神ご自身の正義が成ることをこそ待ち望み、少しでも主イエスご自身が求めている平和への道に従っていく者でありたいと願います。そんな人々に向かって、イエスはこう約束しておられるのではないのでしょうか。「あなた方の髪の毛一本も決して無駄にはしない。忍耐によって、あなた方は神から与えられる命を、平和を、勝ち取りなさい」（19節：意識）。

（文責：望月達朗牧師）

